

知識と知恵

精神科医 宮川健児

ある大学病院の精神科医局に入ってきたばかりの新人の医師たちに、私はこんな話をしたことがある。

「先生たちは、今回、国家試験を合格し、きつと今は、どんな精神科の教授よりも多くの医学的知識を持っているだろうと思う。しかし、知

識では諸先輩に勝ったとしても、哀しいかな先生たちにはまだ知恵がない。精神科医を志すなら、今まで覚えた知識をまず白紙に戻してもらいたい。そして、今後は、知恵を修得する努力をしてほしい」と。

精神科にかかる患者さんには、知識の切り売



りだけではとても治療や指導をすることはできない。目に見えない、他人の心の病を治そうとするときに、医学的知識以上に大切になってくるのが、医師や、患者に関わる看護婦たち個人の人間性、歴史性だと私は思う。受付で、ニコリ微笑み「お大事に」といわれただけで、病が八割回復することもある。

精神科医の場合、一人の患者さんを目の前にしたとき、どこまでその人自身を把握できるか。十人いれば十人の、生い立ち、環境、性格がある。そんな中から起こった病を、一つの医学的治療法だけで解決できるわけがない。きっと、若い医師たちも、自分の生い立ちや環境、性格——祖父母や両親からいわれた言葉、小さい頃に読んだ本、見た風景、辛かった時代、楽しかった時代、自分はどんなふうにごろごろしていたか。現在、自分が一番安心できるときはいつなのか。自分の優越感や劣等感は何なのか——などを医

学的知識にプラスして、一人一人に一番適切と思われる治療法を試みていくことになるだろう。そんなとき必要になってくるのが、知恵なのである。

私が学生だった頃よりも、きっと今の若い医師たちは、そうとう厳しい受験戦争を勝ち抜き、難関をクリアしてきたのだろう。たぶん小学校、中学校、高校でも成績がよく、試験も偏差値も高い点をとっていたに違いない。彼らが子どもの頃というのは、世の中全体が、知識のための記憶術を詰め込み、これに優れている者が、本人も親も教師も社会も、「出来のよい人間」として評価するような風潮になっていた。評価された人間は自信を持って社会に出るのだが、さまざまな荒波の中で、自分の知識がいかに役立たないものかを知り、自尊心が崩れ、中には心の病に陥る人もいる。

人間には側頭葉という知識のセンターが優れ

ている人もいれば、前頭葉、後頭葉、脳幹といった知恵のセンターが優れている人もいる。知識と知恵と健康と、三つとも自信のある人はまれである。しかし、三つともに自信のない人もまれである。なのに「隣の芝生は青い」（私は、隣の麦飯はうまい、というが）と人と自分が劣っている部分をやたら比較したがってしまふ。

勉強したい人はうんとすればいい。音楽や絵画、文章が好きなのはほとんど打ち込み、体を動かして働きたい人はそれで暮らす。そこにはまったく優劣の差はない。究極的には、個々の人が個々の生きがいのために一生を送ればいい。人間とはそういうものだということを、まず私は新人の医師たちに、聞いたかったのである。私の話が、若い彼らに伝わったかどうかかわからない。でも、きつと実際に臨床を続けているうちに、自然にわかってくると思う。そして、私にも経験があるように、心の病気を持つ患者

さんにとつて、最高の精神科医となり得る知恵を持つているのは、一番その人の身近にいて、その人のことを心から真剣に考えることができる家族であり、自分はそれを助けるのが仕事だと気づくときもくるだろう。

●プロフィール

みやがわ けんじ 昭和九年、高知県生まれ。岐阜大学医学部卒業後、同大病院精神科医局勤務。現在、内科神経科・宮川医院院長。岐阜南病院理事。岐阜大学病院精神神経科同門会会長。



足摺岬に近い大自然の中で生まれ育ち、世の中の常識にとらわれない独特の人生観、人間観を持つて患者に接する個性的な医師。昭和五十四年には四国八十八カ所を巡礼。自分で作つた野菜、廃材を利用して建てた囲炉裏小屋「自菜我菜庵」、自然の中でのアウトドアスポーツをこよなく愛す。若い頃から朝は四時、五時に目が覚め、夜は八時過ぎると眠くなってくる原始的な体質という。